

IV 体育 3年次の成果と課題

1 成果

(1) 全体で共有した動きのこつを「選択・決定」する活動を位置付けた単元構成

「選択・決定」の場として、省察をもとに共有化された動きのこつの中から自分や自分たちのチームではどんなこつが必要かを「選択・決定」する活動を単元に意図的に位置付けたことにより、自分や自分たちのチームの動きについてより深く考察したり、それによってどんなこつを使えばいいか、必要感のある仲間との対話の姿が見られたりしたことが成果である。また、選択した動きのこつを用いることで、自分たちの課題を解決するために主体的に活動する姿が見られた。器械運動など個人の動きのこつが重要になる領域では部位や動きの違いで分類したり、ゲームなど複数人が関わる戦術的な動きの領域では難易度別に分類したりして、選択肢を提示するなど、提示の仕方を変えることで、より自分たちの置かれている状況を考えた選択がしやすくなった。

(2) 自らの体力や動きを把握する力を高めるための、発達段階に見合った選択肢の提示の仕方や省察の仕方

グループで見合い、グループ内やグループ間で互いにアドバイスをし合う場、教師がモデルとなり全体でその動きを見る場など、様々な場での仲間との情報交換の機会を単元の中に意図的に位置付けたことにより、自分の「多分このようにできている」という思いだけではない、より客観性の高い自分や自分たちの動きについての現状把握を行うことができたのが成果である。特に、全体でこつの共有を行い、自分たちが着目していないこつやイメージしづらい動きなどもキーワード化したり、分類したりすることで、より今の自分に必要なこつの選択のしやすさにつながった。

また、ICTを活用して、自分や仲間の動きを客観的に検証したことにより、「仲間との対話」に伴う省察が活性化され、共同的な学びとなった。ICTの活用は、見えない自分の動きを把握するために有効であるだけでなく、省察の場の充実につながった。どんな動きをがどこまでできているのか、どうすればもっとよくなるのか等の省察が促され、新たな課題を発見する姿も見られた。自分たち自身の動きの現状を把握することで、より客観性を高めた省察につながった。

2 課題 発達段階をスムーズにつなぐ支援の在り方

自らの体力や動きを把握する力を高めることが課題である。子ども自身が自らの課題に気づき、練習の場や練習の仕方を工夫し、目的をもって運動していく姿を引き出すために、発達段階に見合った選択肢の提示の仕方や省察の仕方にステップアップさせていく手立てを探っていききたい。

また、ゲームができる運動領域では効果的な省察、選択・決定が行われる土台には「動きのこつ」を見付けることに即したタスクゲームが必要となる。その単元で、その授業で身に付けさせたい資質・能力に向かう動きと児童の実態を踏まえたタスクゲームの開発も重要である。